

MAGAZINE OF TEIKYO
ALTERNATIVE LIFE [フレア]

Flair

PHILOSOPHY BOOK

50周年記念特別号
SPECIAL
EDITION

みんなに知ってほしい、大学のココロ。



WHAT'S TEIKYO MIND ?????

理事長・学長
冲永佳史

YOSHIHITO OKINAGA

1973年東京都生まれ。慶應義塾大学理工学部を卒業後、同大学大学院理工学研究科機械工学専攻修士課程修了。現在、学校法人帝京大学理事長、帝京大学学長、帝京大学短期大学学長。2014年には保健医療分野の教育・研究活動などが高く評価され、米国ハーバード大学客員教授に任命される。

冲永学長に聞きました。

「未来の自分」を教えてください！

未来はどんな社会になるのだろうか？ どんな自分になっているだろうか？

でも、未来は誰にもわからない。だから、不安に陥ることもある。

そんなとき、人は原点に戻る。「そもそも自分って、何だろう？」と。

そして、歩んできた足跡を確かめながら、未来への新たな一歩を踏み出す。

学生生活は、その“新たな一歩”のためにあるのかもしれない。

「未来の自分」になる方法を、冲永佳史学長が語ります。





“一生もの”の理念を携えて、社会へ。

「歴史をしのぐ未来へ。」これは、今年2016年に帝京大学が創立50周年を迎えたときに沖永佳史学長が掲げたスローガンだ。次の50年へ向かう今、これまでの50年の歴史を確認することが大切だと沖永学長は話す。「未来へ向かっていくためには、これまでにどんな道のりを歩んできたかという歴史を知ることが大切です。本学50年の歴史はもちろん、学生一人ひとりが持っている歴史を自ら振り返り、その足跡を確かめることで、**これから歩むべき道の指針が得られる**ことなのでしょう。それによって、“歴史をしのぐ未来”を獲得できると信じ、スローガンに掲げました」。

学生にとっては18年間、あるいはプラス数年間の歴史だが、これからの自分を確立するための礎となるかけがえのない足跡だ。「自分史」をしのぐ未来を獲得するために、大学は「自分流」という教育理念で学生一人ひとりをサポー

トしている。「教壇に立ち、キャンパスで学生に接するとき、学生たちは自ら立ち、自ら律する姿勢で学んでいることを実感します。自分流とは、生き方の哲学そのものです。自分のなすべきことや興味のあることを見つけ出し、生まれ持った個性を最大限に生かせるよう行動すること。そのためにも、さまざまな知識や技術を習得するよう努力することが大切なのです」。

そう語る沖永学長は、学生時代、航空機やレーシングカーの流体力学の研究に夢中だったそう。流体の性質を研究し、製品としてどう応用できるかを考えていました。派手なブレイクスルーはなく、地道な研究作業を続ける毎日。試行錯誤の連続でしたが、着実に課題の改善はできました。そこに研究の醍醐味を見出していました」と振り返る。「そんな私の経験から、学生時代に行ってもらいたいと思うことは3つあります。1つ目は、いい友だちをつくり、先

生も含めていい人間関係を広げること。2つ目は、興味を持ったことに対して真っ直ぐにチャレンジすること。そして3つ目は、何か一つでもいいので、『これは頑張った』『これにはこだわった』というものを残すことです。ときには、失敗することもあるかもしれませんが、でも、くじけずに重ね続ける**正しい努力は、必ず新たな知恵として転換されるので、大丈夫**。自分の目標をしっかりと見定め、それに向かって打ち込み、挑戦することで、ほかのさまざまなことに対しても真剣に取り組む姿勢が身につくはず。学生生活のうちに、それぞれの自分流をつくりあげてほしいですね」と、学生に向けてアドバイスを送った。そして、「多くの学生が自分流の活動を実践すれば、キャンパスに活気が生まれ、おもしろい大学になります。みんなで帝京を“おもしろい大学”にしましょう」と笑顔で呼びかけた。

50年前の創立当初は200名ほどだった学生数は、2015年時点で2万3560名と100倍以上に増えている。その一人ひとりが、沖永学長の言葉通りに、それぞれの方法で自分流を追い求めている。実践を通して論理的な思考を身につける「実学」、異文化理解の学習・体験をする「国際性」、必要な知識・技術を偏ることなく幅広く学ぶ「開放性」の3つの教育指針に支えられた2万3560通りの自分流は、帝京大学だけでなく、これからの日本の財産になると言っても過言ではない。

「これからの50年、世界の科学技術は著しい進歩を遂げるに違いありません。そんな時代に求められるのは、**先端技術を人が生きていくための技術として活用するセンス**です。日本では少子化や労働人口の減少によって、ITやロボット、AI技術がますます注目を集めるでしょう。ただ、技術と人間は常に共存するもの。その関係性を

保つことが何よりも重要です。本学では、創立当初から謳う『建学の精神』にあるように、ものごとの見方や探求のしかた、問題の解決方法やそれらに立ち向かう構えを教えています。それらを身につければ、先端技術が普及する時代になっても、柔軟に対応し、新たな価値を生み出す力を発揮できるものと信じています。人は一生かけて学び続けるもの。学生時代に何を学ぶべきかを常日頃から意識しながら、これからの世界を“生きる技術”を身につけてください」

50年前の創立時に掲げられた、「努力をすべての基とし」から始まる「建学の精神」は、学生時代だけの支えではなく、社会人になってからも仕事や生活の支えになる、**いわば“一生もの”の理念**だ。「歴史をしのぐ未来へ向かうためにも、努力して得た知見に基づいて自らの力で考え、判断し責任をもって行動に移してほしいと思います」と、沖永学長は力強く語った。

書籍や資料が山積みされた机で職務に励む沖永学長。学生に向けては、帝京大学で学ぶ意義を「建学の精神」や「教育指針」を引用しながら幅広く考える「帝京学」を講義している。多忙な仕事の合間を縫って、昼食には天ざるを。「麺類が好きなので。休日には子どものためにパスタをつくったりもします。私が好きなのはたらこスパゲティ。卵の黄身を落とすのがポイントで、味わいが濃厚になります」と笑顔で話した。

RE: TEIKYO MIND >>



冲永学長による、現代版“建学の精神”。

〈努力をすべての基とし／ 偏見を排し／ 幅広い知識を身につけ／
国際的視野に立って判断ができ／実学を通して創造力および人間味豊かな／
専門性ある人材の養成を目的とする〉—— これは帝京大学“建学の精神”。
“一生もの”というこの理念、学長がわかりやすく解説します。

[現代語訳版] 建学の精神

SEE THROUGH WITH YOUR OWN EYES.

—— きちんと自分の目で見よう。

EXPLORE EVERYTHING AROUND YOU.

—— たくさんのことを知ろう。

EXPLORE THE WORLD.

—— 世界を知ろう。

HAVE A LIVELY IMAGINATION.

—— 柔軟な想像力を身につけよう。

JOY TO CREATE.

—— そして、創造を楽しもう。

MOVE ON AND ON.

—— もっともっと、先へ進もう。

CREATE THE NEW VALUE FOR YOUR AGE.

—— 世の中に新しい価値を生み出そう。

JUST BE YOURSELF.

—— ぜんぶ、自分らしく。

冲永学長による解説

学問の基本です。テレビ、新聞、SNSなど多様なメディアに対し、「真実は何か？」と常に疑問を投げかけながら情報に接してほしい。

知識は多いに越したことはありません。大切なのは、情報から得た知識を自分なりに噛み砕いて理解し、自分の知恵にすることです。

自分の生活にはない世界（環境）が存在することを知ってほしい。自分と異なる世界を理解する過程が自己理解につながります。

ワクワクする瞬間を創り出すために必要なのは、物事に取り組むときに寛容をもって受け止めることができる柔軟な想像力です。

ワクワクするような経験や、仲間とともに楽しみながら何かを創り上げた経験は、社会に出た後もきっと役立ちます。

常に新しい挑戦を続ける姿勢を忘れてはいけません。挑戦を通して、“生きている実感”を持ってほしいという願いでもあります。

多くの人の賛同を得られ、多くの人を幸福に導き、自分自身も豊かになれる新しい価値の創造が社会に求められています。

地道な努力を続け、自分を冷静に見つめる目を持ち、社会における使命を自分流に果たしてほしい。「自分らしさ」を発掘するためにも。

2016年、創立50周年を迎える帝京大学が立ち返った大学の原点、“建学の精神”。

3号にわたる『Flair』特別号のラストは、この“建学の精神”を冲永学長自らが現代的に解釈することから始まります。

これらのことばは、帝京大学で学び、これからの未来を担うみんなへ向けた、大学からのメッセージでもあります。

だから、帝京の PHILOSOPHY (ココロ)を知る先生方に聞きました——

TEIKYO ってつまり、どんな大学ですか？ >>

01

科学者であり教育者。
自分の核となる
コミュニケーション。

NAOKO TATE

薬学部薬学科 教授

患者中心の医療のために。
コミュニケーション教育の大切さ。

今、医療の現場では、「コミュニケーション」の大切さが声高に叫ばれている。医療技術が高度になり複雑化していく中で、いかに患者さんの声に耳を傾け、その思いを汲み取るか。つまり「患者中心の医療」が問われているのだ。そのためには、さまざまな医療スタッフが連携しながら専門スキルを発揮して治療やケアに当たり、患者さんのニーズに柔軟に対応する「チーム医療」が有効な手立てとなる。このチーム医療で要となるのが、医療者間のコミュニケーション能力だ。帝京大学でも、2014年から医学部、薬学部、医療技術学部という医療系学部で、学部の枠を超えた「医療コミュニケーション」をカリキュラムに取り入れている。その旗振り役である「医療コミュニケーション運営委員長」を務めるのが、薬学部の楯直子教授だ。楯先生は病気の原因となる生体分子を探る物理化学者。それが、コミュニケーション教育にかかわるようになったきっかけは？

「もともと前任校で教務委員長というカリキュ



FILE #01
SEE THROUGH
WITH
YOUR OWN EYES



物理化学者として自らの研究に邁進しながら、教壇に上がる橋先生。専門分野だけでなく、医療人を育む「医療コミュニケーション」教育のカリキュラムをゼロから作り上げ、今も舵取り役を務めている。笑顔を絶やさず、「やさしい」と学生たちから慕われる。人当たりはやわらかだが、教育者としての思いは熱く大きい。



橋 直子

—
帝京大学薬学部薬学科教授。主な研究テーマは生物物理学。医療系3学部の横断的なカリキュラムである医療コミュニケーション運営委員長を務める。趣味は大学時代から始めた生け花で、草月流師範の腕前。



科学者としてだけでなく、 教育者としても社会に貢献したい。

ラム構築などの責任者をしていたのでお声があったのです。当時から、私自身も新しい医療人教育の必要性を感じていました。ただ前任校は薬学部と看護学部だけでしたのでチーム医療の教育プランは実行できず……。しかし帝京大学は板橋キャンパスに医療系学部が集結し、かつ隣には附属病院があるという、願ってもない環境でした。『これは、ぜひ』と思い、赴任して運営委員長を拝命しました。学部教育で一度でも医療コミュニケーションの授業を受けていれば、医療現場で即戦力としてかなり違いが出てくると思います」

薬学部では、1年次に人間性を養うことを目的とした「ヒューマンコミュニケーション」、そして2年次以降は薬剤師として患者とのコミュニケーションスキルを高める「薬学コミュニケーション」が必修だ。さらに4年次では医療系3学科が合同で医療コミュニケーションの演習を行う。「相手の気持ちを考えて対話することがいかに重要かを痛感させられた」、「将来、医療現場で働く人間として、本当に大切な人と人とのコミュニケーションを体験できてよかった」と学生の反応も上々だ。しかし、大学をあげてこれだけのカリキュラムを立ち上げる

のは大変だったのでは？

「私もできるかどうかわからないけど、やってみないと結果は何も出ないので、「うまくいかなかったら全部自分の責任だ」と。薬学部内はもとより病院棟や他学科の先生方に理解を求めたり、助言をいただくのにも、電話やメールではなく直接お会いしてお話をするようにしました。初めてのことで、先生方も『そんなこと、できるだろうか』と聞いていらっしやる。だからこそやはり、お会いするとスムーズに意思疎通できることが多い。周りの方々の無言の応援があったから、できたことだと思います」

最初の1年間は関係者との折衝のために学内を走り回っていた。自分の席にいる時間も少なく、「あっ、なんだか久しぶりに椅子に座った気がする(笑)」ということも。そんな行動力あふれる橋先生の原動力はなんだろうか。

「人類にとって未知の事柄を自分なりに明らかにしていくのが科学者です。しかし、私の中ではそれだけでは十分でなく、社会と結びつき、社会に貢献したいという思いがある。科学者であると同時に教育者であることは、毎年何人も教えて、彼らが社会に巣立つことで、社会貢献に携われることなのだと思います」

02

学生が主体となって学びを進める、
新しい授業の形“アクティブ・ラーニング”。

TOSHIYUKI MIYAHARA 高等教育開発センター 准教授(教育方法研究支援室 室長)

KENSUKE FUKUSHIMA 教育学部初等教育学科 教授(学科長)

考えを深め、広め、道筋をつけるには
仲間とのディスカッションが必要。

2015年9月より利用がスタートした、八王子キャンパスの『SORATIO SQUARE(ソラティオスクエア)』。年々変化する講義のニーズに合わせて、演習室や情報学習室などの最新設備を備えた教室が多数入った新校舎棟だ。

その中のひとつが、アクティブ・ラーニング教室。アクティブ・ラーニングとは「能動的学習」のことで、グループディスカッションやディベートなどを取り入れた授業がそれに当たる。教室には、グループワークを進めるためのタブレットやスクリーンなども完備。基本的に学生が主体となって議論を進め、教員はヒントや気づきを彼らに与えるに留まる。

高等教育開発センターの宮原俊之准教授は、

まだアクティブ・ラーニングに馴染みのない教員に向けて教室の利用方法や、この学習方法がどう役立つかなどを説明し、啓蒙を進めている。春期に説明会を開いた後はほぼ教室が埋まったというほど、教授の間でもアクティブ・ラーニングに対する関心は高い。

初等教育学科の学科長・福島健介教授は、この教室を使って『教育方法理論と実践』という授業を行っている。これは将来学生たちが教員として教壇に立ったとき、それぞれの専門教科を通してアクティブ・ラーニングをどう展開するか学ぶための授業だ。「今は初等中等教育でも、学習指導要領でアクティブ・ラーニングという言葉が明確に出始めています。今後は当然、教員がこの知識や技術をどの程度持っているかも問われてくるでしょう」と、教育現場でも必須となりつつあることを教えてくれた。





物事を理解するまでの道筋を知っておくこと。

深い理解は「人に説明できる力」を作る。

「先日、6人でグループを作ってディスカッションをさせながら、どうやって円の方程式を導き出すか考えてもらいました。すると、ディスカッションがうまくいっているグループは、最後に個人で問題を解かせても全員正解を出すわけです。ところがうまくいかなかったグループは、ひとりも正解が出せない。なるほど、やはり考えを深めたり、広めたり、道筋をつけたりするには、ディスカッションが大事なのだと思いましたね」(福島先生)

福島先生は「今までは試験のときに人と相談したり、人の答えを見たりすると怒られたよね。でも、社会に出たらひとりでも悩んでいると『なぜ聞かないんだ』と怒られるよ」と学生たちに話しているという。これからは大学でも、ディスカッションから得られる学びを通して能力を高める、という発想がより浸透していこう。宮原先生は、学生にアクティブ・ラーニングを通して「自分がどうすれば理解できるのか、その道筋を知ってほしい」と話す。先生から教

わってわかったつもりになっていても、実際にそれを人に説明しようとするときできない学生が多いからだ。「自分の考えをまとめて外に出したり、何かと比較して違いを明確にしたりすることで、深い理解につながっていく。理解が深ければ、きちんと人に説明することもできます」と宮原先生。その力は、就職後もビジネスの世界で役立つだろう。大学は研究機関であると同時に、学生たちを社会に送り出すための実践的な機関でもあるのだ。



LEFT. 宮原俊之

専門は、インストラクショナルデザイン(教授設計学)。アクティブ・ラーニングの啓蒙のほか、教員を対象に教育改善のアドバイスなども行っている。これから教員をめざす学生へ向けた授業も担当する。



RIGHT. 福島健介

高等教育におけるアクティブ・ラーニングという考えがアメリカで生まれたおよそ25年前、シカゴの大学でいち早くそれに触れた経験があることから、能動的学習方法の大切さを実感し続けている。



上/教育文化学科・田嶋先生の「教育学演習」兼「卒業研究」。この日は英語の動画を見ながら、同時通訳に挑戦。スクリーンに映し出される動画やスライドはグループごとに変えることが可能。また、スクリーンに直接書き込んでディスカッションに役立てることもできる。下/ひとり1台使えるタブレット。グループワークに必要な操作が、すべて行える。



03 海外の暮らしを体験し、 日本の文化や 歴史に気づく。

MASAKO OHNO

外国語学部外国語学科 教授

比較文学や「全員留学制度」は、異文化理解を深める最初の一步。

東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、インバウンド（訪日外国人旅行）の需要がますます高まる中、通訳案内士という国家資格が注目されている。大野雅子教授の「実践通訳ガイド」という授業では、より実践的な英語力の習得をめざし、東京都内で実際に通訳ガイドを行う。「帝京大学にはイギリスのティーズサイド大学からティーチング・アシスタントが毎年

来ます。彼らにツアーガイド役として浅草や原宿といった観光地に同行してもらい、学生が日本の文化を英語で伝える演習を行っています。『雷おこし』を英語で説明しようとするとき、普段日本語で考えていることをいきなり英語で表現することの難しさを、学生たちは認識するようです」と大野先生は話す。

2017年度からの新カリキュラムでは、大野先生の専門分野である比較文学の講義も始まる。「自国の文化や歴史を外国人に伝えるとき、大切なのは知識と思考力です。英語圏の文化

や価値観について深い洞察をもって初めて英語を自在に操ることができるようになります。外国を知ってこそ日本を理解できるので、日本を理解しなければ外国も理解できません。日本人が英語を話すということは、とりもなおさず、日本人としてのアイデンティティを語ること。『比較文学』や『比較文化』をカリキュラムの一部に取り入れたのは、英語で語るべき『自分自身』を再発見させるためです。それこそが確かな英語コミュニケーション力を身につける道です」。

教材は、平安中期の古典文学『源氏物語』と16世紀イギリスの叙事詩『妖精の女王』。「東洋と西洋の愛のかたちを比較しながら読み解くことで、現代の生活習慣やジェンダーといった社会的価値観まで垣間見ることができます。日本と海外の異なる価値観を深く分析する視点を持つことで、英会話のための英語力ではなく、真の英語力が養われるのです」。

そんな、知性に裏打ちされた語学力が求められるグローバルな時代にあって、外国語学部では、2017年度の入学者より全員が留学を必須とする「全員留学(GLOBAL CAMPUS PROGRAM)」をスタートさせる。2年次の秋期に世界各地の提携校で全員が留学期間を送る。「入学時から1年半、語学をしっかりと学んでから留学するので、滞在中の語学の吸収力はいつも増すはず」。



自国の文化や歴史を外国人に伝えるとき、
大切なのは知識ではなく知性です。



そのためのカリキュラムやサポート体制も充実させます。また、留学によって習得した語学力を維持、向上させるためには帰国後の3、4年次の過ごし方も重要です。日常的に言語を聴く、読む、話すことが大切になるでしょう」と、アドバイスする大野先生。

「私自身、30代でアメリカのプリンストン大学に4年間留学しましたが、旅立つとき、現地で日本語は絶対に話さないと誓いました。最初の1年間は日本人をとにかく避けてました。それくらいの覚悟で英語力を身につけようと挑んだのです。毎週開かれるパーティには何が何でも出席。アメリカ人は機関銃のように話しかけてきます。会話についていくのに必死でしたが、そうした苦勞を重ねたことで、英語を話すのが楽しくなりました。今でも英語を話すことは楽しいです。『全員留学』で訪れた国では、若者の特権でもある好奇心や冒険心を持って、異国の暮らしやコミュニケーションを楽しんでほしいですね」

海外生活にどっぷりと浸かれば、日本との違いが強く意識される。それは、比較文学の醍醐味に通じるものでもあり、異文化理解を深めるための最初の一步にもなるに違いない。

文学少女だった大野先生。「『不思議の国のアリス』を原書で読もうとするうちに英語への関心を深めていきました」。留学したプリンストン大学の比較文学の授業で『源氏物語』に出会い、「日本を再発見すると同時に、そこに自分の価値観が存在していることを見出しました」と話す。長期休暇はLA近郊の住まいへ。「バーズ&ノーブルズ」という書店で本を買い込み、読書三昧の日々を過ごすそうだ。



大野雅子
外国語学部外国語学科教授。1985年津田塾大学文学部英文学卒業。東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程中退。米国プリンストン大学比較文学科博士号取得。現職に至る。

TEIKYO STAFF VOICE

帝京大学卒の職員が考えているコト。

学生時代の話や今後の話。帝京大学出身の職員6人による言葉。

充実した学生生活を送るには、どうしたらいいのか？

OB・OGが在学生に送る、温かいメッセージを参考にしてください。

さまざまな出会い・経験が

新しい自分に出会えるきっかけです。

板橋キャンパス／教務課

渡邊悟美さん [理工学部バイオサイエンス学科／2011年卒]

在学中、教員免許や学芸員等の専門的な資格を4つ取得することに挑戦しました。このため、通常よりも講義・課題・実習が多く、4年次にはこれに加えて植物ホルモンに関する卒業研究や進路選択。その合間に、アルバイトや趣味も楽しみました。新たな出会いや経験を求めて、さまざまなことにチャレンジ。とにかく、自分の知らない世界を知ることが新鮮で刺激的でした。3年次の夏季休暇には、博物館実習の翌日から社会福祉施設での実習と、少しハードな時もありましたが、今振り返ってみても充実した学生生活だったと思います。特に学外での実習は

どれも心に強く感じるものがあり、実際に経験することの大切さを生で実感しました。

私が学生の頃から、帝京大学の教育環境や制度は充実していましたが、年々向上しています。在学生のみなさんにこの施設や制度を有効活用して、どんどん新しいことにトライしてほしいです。そこから繋がる人との出会いや経験は新しい自分に出逢えるきっかけになるかもしれません。今は、事務の立場として、学生をさまざまな面からサポートしていきたい。それが、卒業生としてお世話になった帝京大学にできる、私なりの恩返しだと思っています。

帝京歴
10
YEARS



素晴らしい人との出会いが

学生生活を充実させてくれた

八王子キャンパス／教務グループ

黒瀬博明さん [文学部教育学科初等教育学専攻／1986年卒]

私にとって、大学生活で学んだ一番重要なことは人間関係の構築だったと思います。出身の広島から東京に出てきて、初めての一人暮らし。大学で知り合った多くの友人はもちろん、お世話になった先生方との出会いはたいへん貴重なものでした。30年以上経っても時々連絡を取り合い、遠く離れていても今でも交流があります。小学校の教員になるという同じ目標を持った友人たちとは、夜遅くまで一緒に勉強をし、また遊ぶ時はとことん遊びました。自分だけ遊んで過ごすことはできない、自然と勉強をしなければならぬ環境でした。今の学生のみな

さんには考えられないかもしれませんが、4年間で200単位以上修得しました。

恩師のすすめで卒業後は本学の職員になり30年が経ちました。これまで目標に向かって努力する学生や、その学生を熱心にサポートする先生方、学びの環境が整備されていく様子を見てきました。今後より学生が過ごしやすい環境に整備されていきます。帝京大学が全国的に今まで以上に認知され、「帝京大学にはいろいろな可能性がある」と思われるような大学にしていきたい。これが、職員になった当初から変わらない私の目標です。

帝京歴
34
YEARS



QUESTIONS

①帝京大学のよいところ ②在学時の印象深いできごと・思い出 ③今後の目標 ④在学生へのメッセージ



帝京歴
15
YEARS

八王子キャンパス／広報グループ

伊藤祐平さん

[法学部法律学科／2001年卒]

①学びたいことを学べる自由な雰囲気 ②放送研究会 T.U.B.E. に所属しており、学外の DJ フェスティバルで優秀賞を貰ったこと。③帝京大学に関する情報を高校生や一般の方々に発信し、魅力的な大学であることを伝えていきたい。④大学時代が一番自由のきく時間。しかし、4年間はあっという間です。無駄に過ごさず、勉強も遊びも、時間を有益に使うように過ごしてください。



帝京歴
9
YEARS

八王子キャンパス／入試グループ

小宮望夢さん

[文学部社会学科／2012年卒]

①向上心のある学生が多いこと、また、その目的達成を支援する制度があること。②ボランティアサークルの構内清掃活動を通して、他の学生や職員と交流が増え大学生活が一変した。③在学時代に感じた「帝京大学」のよいところを忘れずに、現在のあり方を考え業務に生かしていきたい。④授業は「自分の興味」を学べる時間。教員の生きた言葉でそれを学べる貴重な時間を大事にして欲しいです。



帝京歴
18
YEARS

大学本部(板橋)／入試室

黒瀬博明さん

[文学部教育学科教育学専攻／1998年卒]

①存在の強さ。さまざまな可能性があるところ。②個性豊かな同級生との出会いは、とても刺激的でした。また、盛大な入学式に驚き、高校との違いにたじろいだことも記憶に残っています。③今後、大学を取り巻く環境が大きく変化しても、帝京大学のよさをずっと伝えていきたい。④今の出会いを大切に育んでほしい。入学したということは、縁があるということ。よりよい学生生活となりますように。



帝京歴
5
YEARS

宇都宮キャンパス／学生サポートチーム

庄佳瑤さん

[経済学部地域経済学科／2016年卒]

①学生支援が充実していること。②三年生の時に、進路や学業などで落ち込んだ時期がありました。その時に、「地域文化論」の講義で世界各地の文化を知り、ヨーロッパへの一人旅を計画。ゼミ担当の先生からアドバイスをもらいながら実行したことで、いい経験になりました。③学生から信頼されるような関係性を構築する。④4年間で知識を身につけ、自分の強みが見つけれられるよう、頑張ってください。

CAMPUS

ITABASHI 板橋



医学部、薬学部、医療技術学部のある板橋キャンパス。最先端の設備を誇る医学部附属病院があり、学生

たちは豊富な実習を通して総合的かつ実践的な医療を学んでいる。医学総合図書館には、22万冊の図書と6,000種の電子ジャーナルやデータベースがある。入試センターや大学本部なども隣接し、帝京大学の中枢機能が集約されている。

HACHIOJI 八王子



経済学部、法学部、文学部など6学部設置されている。新校舎棟「SORATIO SQUARE」は、第II

期工事が進められ、2017年11月に1,000名以上を収容できる大規模ホールや1,000以上の席数がある食堂などを設置予定。大規模なキャンパスリニューアルで、時代に即した学びの環境づくりを推進している。

UTSUNOMIYA 宇都宮



理工学部、経済学部地域経済学科、医療技術学部柔道整復学科の学生が通う宇都宮キャンパス。多く

の緑で満たされた広い敷地は東京ドーム6個分。実習工場やオートモビル・テクノロジーセンターなど、実習施設が充実。キャンパス内に一般の方も利用できる整骨院があり、研究だけでなく、地域の人の交流も活発。

FUKUOKA 福岡



有明海を一望でき、ロケーションが最高の福岡キャンパス。先端医療が学べ、学生たちは日々学習に

励んでいる。キャンパスの中心には、四季の移ろいを感じられる広場があり、学生だけでなく、研究者や来訪者の憩いの場、交流の場として活用されている。医療技術系の研究施設が複数ある研究センターを中心に教育環境も充実。

KASUMIGASEKI 霞ヶ関



永田町駅から徒歩10分以内の霞ヶ関キャンパスでは、大学等委託訓練講座や霞ヶ関キャンパス公開講座などが

行われている。1か月に数回公開講座を開催し、無料で参加できる。幅広い知見を身につけられるような、世界の文化や経済、外交など講座も多様。また、事務室には帝京大学自己点検・評価推進室が置かれている。

04

身近な「眼」の世界の面白さを
若い力で伝えていく。

KAKERU SASAKI 医療技術学部視能矯正学科 助教

ERI TANAKA 医療技術学部視能矯正学科 助教

優秀な視能訓練士を育てることが、
医療の限界を引き上げる。

「視能訓練士」という職業をご存知だろうか？
病院やクリニックで、医師の指示のもとに斜視
や弱視の治療に携わり、眼科検査を行う眼のス
ペシャリストだ。近年、子どもから高齢者まで
“眼の健康”に対するニーズが高まり、視能訓練
士の活躍の場も広がっている。2004年、医療
技術学部に視能訓練士を養成する視能矯正学科
が新設された。その規模は日本最大級。質の高
い視能訓練士を輩出していると、医療現場での
評価も高い。

そんな未来の視能訓練士を育て上げているの
が、佐々木翔助教と田中絵理助教だ。常勤の教
員は20名ほど、設置されてまだ12年と比較
的新しいからか、若い先生方が目立つ。二人と

も視能矯正学科の1期生と2期生だ。佐々木
先生は斜視と弱視を専門に研究と講義を行い、
田中先生は実習で学生に各種検査の実技を指導
している。今や一線で活躍する二人に、視能訓
練士の道をめざしたきっかけを聞いてみた。

「僕は、この学科を知ったのもたまたまですし、
大学入学時に視能訓練士を知っていたわけでは
ないんです。ただ医療系の仕事に興味があった
ので」と佐々木先生。対する田中先生も「私も
そんなに詳しく知っていたわけではないのです
が、大学の進路を決める際、医療系へ進もうと
思っていて、当時、コンタクトレンズを使い出
していたので、眼科に携わる仕事を探して」と、
視能訓練士をめざす明確な理由はなかったとい
う。ところが、実際に勉強を始めると、“眼”
の世界にのめりこむことに。

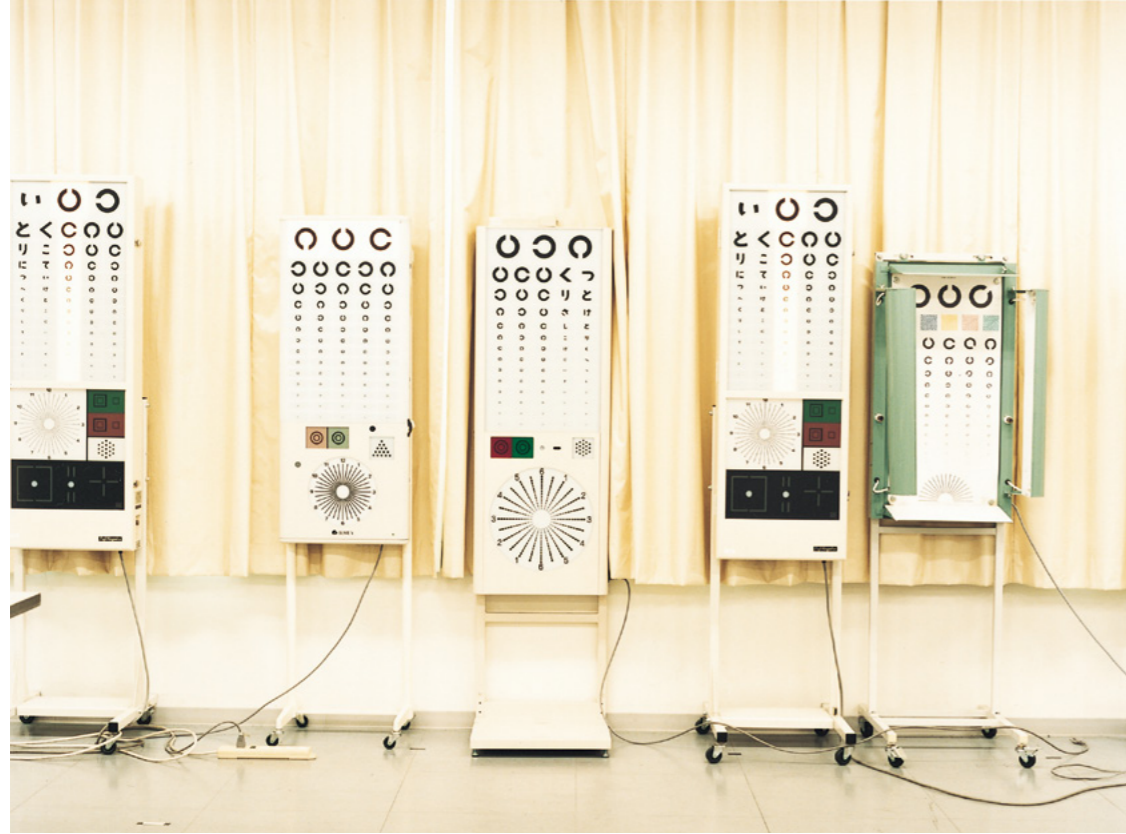
「単純に眼は面白いです。眼球は2.5cm ぐら





眼の世界は面白い。

研究をすればするほど引き込まれる。



FILE #04

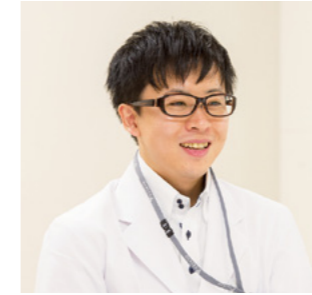
CREATE

THE NEW VALUE

FOR YOUR AGE

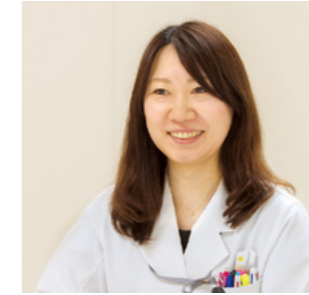


日本屈指の規模と設備を誇る帝京大学の視能矯正学科。2004年に新設されて以来、多くの優秀な視能訓練士を輩出してきた。それを支えてきたのが、20名ほどの教員たちだ。若手も多く、皆、仲がいい。学会後の打ち上げなど杯を交わす機会も多い。「みんなで集まるのが好きなんです」と佐々木先生は笑うが、将来のビジョンを語り合うなど、重要なコミュニケーションの場でもある。



LEFT. 佐々木 翔

医療技術学部視能矯正学科助教。視能矯正学科の1期生。修士課程を修了後、医学部附属病院勤務を経て現職。臨床経験を元に斜視測定器を開発するなど精力的に活動を行う。趣味は学生時代から続ける音楽バンド。



RIGHT. 田中絵理

医療技術学部視能矯正学科助教。視能矯正学科を卒業後、個人眼科を経て、修士課程に通いながら助手に。今年から助教に就任。夏はホットヨガ、冬はスノーボードを楽しむ。若手の教員、みんなで雪山に行くことも。

いの大きさですが、すべての情報の8割以上を処理しています。いろんな役割と機能があって勉強すればするほど面白い。興味さえあればいつまでも楽しみながら研究できる。そんな魅力があると思います」と佐々木先生は語る。

今では視能訓練士を将来のビジョンに見据えて、同学科を志す学生がほとんどだ。

「眼に悩みを持っている学生が他学科に比べて多いと思います。幼少時に、視能訓練士にお世話になったことがきっかけになったという学生は少なくありません」と、田中先生。

学生たちの思いに応えるべく、真摯に向かい合う二人の夢は？

「患者さんと接していて、医療の限界を感じることがたくさんあります。『機械の制限があってここまでしか調べられない』、『治療法がないからしょうがない』という部分に不満を感じています。いい検査装置がないのなら自分で作ればいいし、治せるような方法を模索したい。また、教員としてたくさんの優秀な人材を自分の手で育てていけば、医療をちょっとずつ押し上げていくことになる」と、佐々木先生。

田中先生は「患者さんの求めている“クオリティ・オブ・ビジョン”(見える質)を見出すために、できることを日々精一杯していきたい」と語る。

若い力によって、視能矯正学科、そして日本の医療は前進していく。





FILE #05
MOVE ON AND ON

05

型にはまらない
生き方が、次なる
最先端技術を切り拓く。

KOZO MIZUTANI
理工学部情報電子工学科 講師

通学時間に身についた
考える習慣で、
ウェアラブルデバイスの次へ！

校舎の中で、オフィスで、カフェで。手のひらをパッと広げると、そこにスマホの画面が映し出され、手軽に操作できる。そんな、近未来の情報技術の実現に向けた研究を行っているのは水谷晃三講師だ。

「天井に設置したセンサーが使用者の手のひらを認知し、プロジェクターから画面を映し出します。今、スマートウォッチやヘッドマウントディスプレイなどウェアラブルデバイスが注目を集めていますが、このシステムはその次をめざしていて、成功すれば端末を持ち歩く必要がなくなります。学校の授業を支援したり、在宅医療の介助や見守りにも応用できるでしょう」
最先端の情報技術の研究に打ち込む水谷先生



FILE #05
MOVE ON AND ON



顧客が要求する内容は千差万別。

現場で即戦力になれる学生を育てたい。

は、教鞭を執る帝京大学理工学部の卒業生だ。埼玉県の自宅から宇都宮キャンパスまで、片道4時間ほどかけて通学していたという。「長い車中、よく考えごとをしていました」と、笑顔で話す水谷先生。「当時、塾の講師のアルバイトをしていて、中学生に数学を教えていました。私も因数分解や2次方程式ができずに苦しんだ経験があったので、生徒にどうすればわかりやすく理解してもらえるかを考えていました」。

情報システム学を専門にする水谷先生が、因数分解や2次方程式が苦手だったというのは意外だ。「これらは公式にあてはめて解いていきますが、その“型にあてはめる”という作業が苦手だったのかもしれない。数学に限らず、考え方や生き方に関しても、誰かに用意された道を歩かされるのは嫌でしたから」。

卒業後、企業に就職し、業務系のシステム開発や一般消費者向けのソフト開発に携わり、転職してインターネット接続事業の仕事にも従事したが、「大学院で情報システム関連の研究・開発がしたい」という夢をあきらめきれず、3年間勤めて蓄えた貯金と奨学金を利用して、理工学研究科へ進学し、大学の教員となった。「学生に教えるうえで、企業に勤めた経験がとても役立っています。企業の仕事では、顧客が要求する内容は千差万別で、教科書通りにはい

きません。実践の場で即戦力になれる学生を育てたいと考え、授業では教科書以外のことも教えています」

そのひとつが、顧客の要望を記した「企画書」に沿って、グループ別にシステムを独自に開発するPBL (Project Based Learning) 型授業。公共施設の予約システムの開発依頼を受けたと仮定し、グループごとにミーティングを開き、顧客の要望を汲み取りながら設計書を作り、システムを完成させる。「企業での仕事を模倣的に体験するのが目的です。答えはありませんし、失敗してもそこから学ぶよう指導しています」。さらに、計画、実施結果、今後の対策などを上司に伝える「進捗報告書」の書き方も指導するなど、相手が何を求めているかを推し量りながら対応することの大切さを教えている。

そんな水谷先生の趣味は、中学生の頃に興味を持ったという風景写真の撮影。「写真部やサークルに入らず、独学で技術を習得しました。やはり、型にはまるのが嫌なのでしょうね」と笑みを浮かべる。どんな写真を撮れば観る人が感動するか、そしてさらには、どんな研究成果が世の中のためになるのか、「1日にひとつ、アイデアを出すように心がけています」。

片道4時間の通学の際に身についた考える習慣は、今も続いている。

研究室にはセンサーとプロジェクターが設置され、水谷先生が手のひらを広げるとスマホの画面が映し出された。この技術を応用した研究も対象にしている。例えば指文字のかたちをセンサーが認識すると、パソコン画面に指文字が表示される。「このシステムを教育の分野にも活用できればと考えています」と、教育と情報技術の融合を視野に入れた研究にも取り組んでいる。



水谷晃三

理工学部情報電子工学科講師。博士(工学)。2000年帝京大学理工学部情報科学科卒業。富士ソフトABC株式会社(現富士ソフト株式会社)等に勤務後、帝京大学大学院理工学研究科博士課程修了。現職に至る。



06

脳、そして、遺伝子。
次世代に受け継がれる研究。

TAKAE HIRASAWA

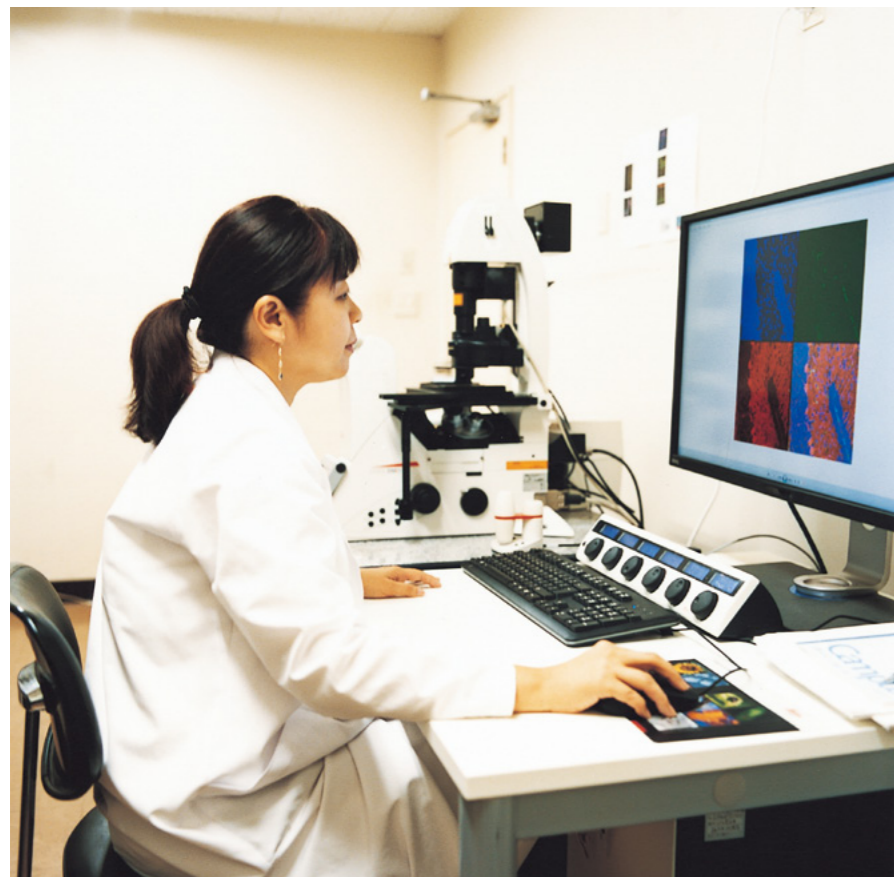
理工学部バイオサイエンス学科 講師

脳機能の研究と子育てを両立する、
エネルギッシュな“リケ女”先生。

母胎に生命が宿ったときから、赤ちゃんの身体には臓器が形作られていく。心臓や肝臓などの臓器は母胎から生まれ出たときにはすでに完成しているが、脳は未完成。脳は身体が育っていく中で発達し、完成されていくのだ。「胎児期も含めた脳機能の発達の過程で、精神ストレスや子育てなどの環境がどんな影響を与えるか、そのメカニズムをマウスの脳を用いて調べています」と、平澤孝枝講師は自身の専門分野である脳神経科学や発生生物学について語る。「例えば、遺伝子の一部を欠損させたモデルマウ

スを用いた発達障害の研究では、脳機能に異常をきたしたマウスの行動や神経機能がどのように変化するかを観察します。その結果から、発達障害にとってどの遺伝子が重要かがわかります」

学生への講義では、マウスと人の社会性についても触れる。「マウスも人も、集団の中にいた方が学習効果が上がります。ただ、異なるのは、集団で学習し、ひとつのことを成し遂げ、報酬を得たとき、人はみんなで喜び合うのです。それを『共感』と呼びます。逆に、うまくできなかったときは落ち込みますが、それをモチベーションに変え、励まし合います。それも、『共感』。その点が、マウスと人の脳の違いで、人の脳がより成熟している証なのかもしれません」。



むしろ、女性は男性よりも、
人生の選択肢に恵まれていると思います。

動物の脳の研究に勤む平澤先生は、9歳の息子さんに対して、「つい、実験対象として見てしまいます」と笑みをこぼす。「幼い子どもは写真を撮るときもピースサインができません。脳機能が未発達だから。それが3歳程度になるとできるようになり、年齢を増すと、レンズに向かって笑顔を作れるようになります。やがて、カメラを向けると恥ずかしがったり、ふざけて“変顔”を作ったり。何気ない子どもの日常にも脳機能の発達が見取れるのです」。

母として、妻として、教員として。仕事と子育てを両立させている平澤先生のように、社会では女性の活躍が期待されている。理系の世界では女性が少ないというイメージが強いが、平澤先生から見て、女性が活躍するための社会の後押しが足りないと感じることはあるのだろうか。「そんなことはないと思います。むしろ、私は女性は男性よりも人生の選択肢に恵まれていると考えます。結婚して仕事を辞めるか続けるか、子どもを出産して

仕事を辞めるか続けるか、あるいは結婚しないで仕事を続けるか、というようにいっぱい選べるな、と。私の場合、夫が暮らす埼玉県から、研究のために息子を転校させて宇都宮キャンパスに移りました。一人っ子なので寂しいときもあるでしょうが、仕事に妥協せず楽しく働く母親の姿を見せることも教育かなと思っています。帝京で学び、卒業していく女子学生も将来、仕事と子育ての両立や選択に直面するときに来るかもしれませんが、自

分が楽しいと感じる道を選んでほしいです」とエールを送る。

多忙な研究の合間を縫って、『TEIKYO UTSUNOMIYA GIRLS』という女子高校生向けの冊子も作っている平澤先生。なんと、取材、撮影、執筆、デザイン、編集をひとりでこなしている。「私自身が大学を知ることができ、楽しいですよ」と笑顔。オープンキャンパスで訪れる女子高校生に宇都宮キャンパスの魅力を伝え、“リケ女”が増えることを願っているそうだ。

「帝京は研究施設が充実しています」と平澤先生。「例えば、この共焦点レーザー顕微鏡。重なり合った脳細胞を3次元に構築してひとつの画像で見せてくれるので便利。学生も使えますよ」とのこと。冊子の制作では学内で学生に声をかけ、「自分流」をボードに書いてもらって撮影。学生の1日の過ごし方や研究機器の機能を紹介するページも。



平澤孝枝

理工学部バイオサイエンス学科講師。学術博士。1999年日本女子大学大学院人間生活学研究科博士課程修了。国立精神・神経医療センター研究員、山梨大学大学院医学工学総合研究部助教などを経て現職。



07

地域に根ざし、学生の「家族」となる。
かかわり、見守り、導く存在として。

TAKASHI YUKIHIRA 福岡医療技術学部理学療法学科 講師

地域医療で活躍する
理学療法士を育てたい。

おそろいのはっぴを着た集団が、『炭坑節』の音頭に合わせて踊り歩く。福岡県大牟田市の夏の風物詩、大蛇山まつりの「一万人の総踊り」だ。地元の学校や企業、市民が、大牟田の夏を盛り上げようと有志で参加する。日が傾きようやく暑さもおさまりはじめたが、会場の目抜き通りは踊り続ける老若男女の熱気で満ちている。その中に「帝京」と染められたのはっぴを着た集団が。大牟田市にある福岡キャンパスに通う福岡医療

技術学部の学生と教職員だ。総勢 200 名ほど、踊りの息も合い和気あいあいとしている。そんな学生たちの後方で踊っているのが、理学療法学科の行平崇講師だ。

「このお祭りは、地元の人たちがもっとも大切にしている行事のひとつ。だから地域に根ざす福岡キャンパスでも積極的に参加するようにしています。まあ、何よりも楽しいですから(笑)」

福岡医療技術学部がめざすもののひとつは、地域医療に貢献する人材の育成。その礎が、高度な知識と技術、そして患者さんとコミュニケーションをとる能力だ。そのためにさまざま



2014年にリニューアルした福岡キャンパスには、九州はもとより全国から学生が集まってくる。親元を離れる学生も多く、教員たちは公私ともに学生をサポートするため、実に仲がいい。とりわけ行平先生は学生からの信頼が厚い。「優しくて私たちのお父さんみたいな存在です」と学生からの声。毎夏、教員と学生みんなで地元の大蛇山まつりに参加するのが恒例行事。生まれも育ちも大牟田市の行平先生は音頭役のひとりだ。



卒業生と医療現場の話をする。

成長を感じるうれしい瞬間。

な地域のボランティア活動や地元の行事に積極的に参加し、学生の素養を高めようとしている。「ボランティアに行くと、いろいろな年代の方がいらっやいます。そこでのコミュニケーションを通して『いい経験ができました』という学生が多いですね。特に大牟田市は全国でも高齢化が進んでいる都市なので、高齢化対策や介護予防などの勉強にもなります」と、行平先生。2009年から理学療法学科で教鞭をとっているが、それまでは地域医療の最前線で活躍してきた。それだけに「コミュニケーション」の大切さを身をもって知っている。ケガや病気で身体が不自由になった患者さんの身体機能の回復や維持を行うのが理学療法士。言葉を交わしたり心情を察する、人と人との触れ合いが大切なのだ。医療から教育の現場に移った行平先生だが、その思いは今も変わらない。「理学療法学科のゼミでは、教員が学生たちの勉強から学生生活、さらに就職まで目を配り、

さまざまな相談に乗ることもあります。ですから、日常的にも教員と学生の距離がとても近いですね」「時には恋愛相談に乗ることもあります」と笑う行平先生だが、その信頼関係の源は、やはり人と人との触れ合い、コミュニケーション。「学生が実習に出て、現場でもまれて帰ってきたときの表情を見るのが楽しみです。何人かは本当にいい顔をして帰ってくるんです。後で『いい顔をしているね』と言うと、『そうですか!』とまた積極的にがんばるようになる。そんな学生の成長があるから教員は楽しい。去年は4年生の担当だったので、卒業式のときにみんなの前であいさつをしたんです。『絶対に泣かないぞ!』と思っていたんですが、やはりいろいろ思い出してしまい……」

来年の夏もまた、大蛇山まつりはやってくる。行平先生もまた、はっぴ姿で踊る学生たちを温かく見守っていることだろう。

行平 崇

福岡医療技術学部理学療法学科講師。専門分野は中枢神経系理学療法と評価学。学生時代に野球をしていたことからスポーツ系のリハビリに興味を持ち、医療の道へ。福岡キャンパスの野球サークルの監督も務める。



NOTICE BOARD.

本学の設備投資と財務状況

1. 最近の主な設備投資事業

帝京大学は、教育環境を高品質に維持・向上させるために、事業計画に基づいて各キャンパスの教育研究設備投資を積極的に行っています。本年4月に開院した医学部附属新宿クリニックはJR新宿駅に隣接する商業ビル内にあり、先端の医療設備と医療機器を導入して人間ドックと専門外来による医療サービスを提供しています。



板橋キャンパス新校舎 (2011年度竣工)



福岡医療技術学部新校舎 (2013年度竣工)



医学部附属病院新病院 (2008年度竣工)



八王子キャンパス新校舎 (2015年度高層棟竣工、低層棟建設中)



医学部附属満口病院新病院 (建設中)



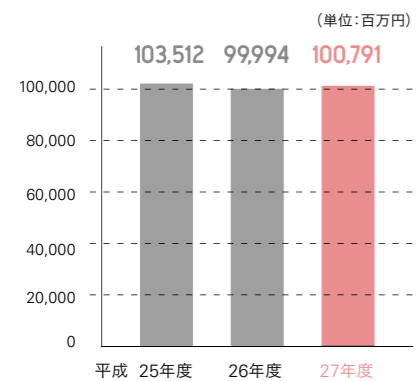
医学部附属新宿クリニック (2015年度竣工)

2. 平成27年度の財務状況

帝京大学は、強固な財務基盤を背景として、積極的な設備投資と安定的な学校運営を両立させています。 *学校法人帝京大学の財務データより

[事業活動収入]

事業活動収入は、一般事業法人の売上高に近いものです。下のグラフのとおり、本学の事業活動収入は毎年安定的に推移しています。なお、事業活動収入の80%以上は学生生徒等納付金と付随事業収入(医療収入等)です。



[基本金組入前当年度収支差額]

一般事業法人の税引前当期純利益に近いものです。金額が大きければ良いというものではありませんが、教育研究設備投資に資金を回すためには、この収支差額が安定的に推移する必要があります。

年度	収支差額 (百万円)
平成25年度	(+) 16,994
平成26年度	(+) 10,750
平成27年度	(+) 9,659

[基本金組入額]

教育研究活動に必要な資産を保持していくために、事業活動収入を財源として基本金を継続的に組み入れています。

年度	組入額 (百万円)
平成25年度	(+) 25,589
平成26年度	(+) 17,874
平成27年度	(+) 15,905

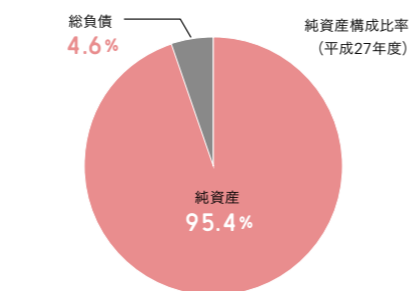
[総資産額]

積極的な設備投資等により、本学の資産規模は毎年増加しています。

年度	総資産額 (百万円)
平成25年度	(+) 554,564
平成26年度	(+) 565,358
平成27年度	(+) 573,436

[純資産構成比率 (平成27年度)]

下のグラフのとおり、本学の資産の大半は純資産(基本金+繰越収支差額)で支えられています。有利子負債(金融機関借入金等)はありません。



CEREMONY



帝京大学創立記念式典・祝賀会を挙げる

帝京大学の創立50周年を記念して、2016年6月29日(水)に、創立記念式典をライジング・スクエア SMBC ホール、祝賀会をパレスホテル東京(東京都千代田区)で挙げてまいりました。学内外合わせて約1,200名の来賓にご参列いただき、創立記念式典・祝賀会ともに盛大に執行。創立記念式典は、沖永佳史理事長・学長の式辞から始まり、基調講演やパネルディスカッションを実施。本学50周年のスローガンである「歴史をしのぐ未来へ」をテーマにしたパネルディスカッションでは、沖永佳史理事

長・学長から100周年に向けた決意表明もありました。祝賀会では、主催者挨拶、来賓挨拶、鏡開き、さらには本学空手道部やチアリーディング部による演技も行われました。空手道部による迫真の演舞とチアリーディング部の活気に満ちたパフォーマンスで、本学の新たなスタートに花を添えました。なお、創立記念式典・祝賀会の様子は、50周年特設サイトの「TEI-tube」からご覧いただけます。当日は、放送研究会 T.U.B.E の学生がレポートを担当。学長へのインタビューも決行しています。

NEWS

TEI-tube 配信！ 50周年記念グッズも

帝京大学創立50周年のスローガン「歴史をしのぐ未来へ」のステートメントをベースに、みんなでつくる動画を50周年特設サイトの「TEI-tube」に続々公開中。沖永佳史理事長・学長の言葉、各キャンパスの学生の言葉、スポーツ部員による言葉、それぞれの言葉で「歴史をしのぐ未来へ」に込められたメッセージを発信しています。また、パリコレクションに参加するデザイナー・荒川一郎氏がデザインする50周年記念グッズの情報も公開しています。



WANTED!!

Flairワークショップ参加者募集

【第26回 ワークショップ】

日本の文化に触れよう！
落語入門講座。

近年、映画や漫画の題材として扱われ、若い人たちにも親しまれるようになった落語。今回のワークショップでは、ユニークな世界をより楽しんでもらうための落語入門講座を開講します。嘶の楽しみ方や、ちょっとした仕草を嘶家さんに教えてもらう体験などを予定しています。

- ・開催日 2016年10月中旬～11月上旬を予定
- ・開催場所 東京都内を予定。
※開催場所は変更になる可能性があります。

- ・応募の仕方
応募は下記アドレス宛にメールにてお申し込みください。
workshop.flair@gmail.com
本文に(1)名前(2)学部学科・学年(3)電話番号を記入し、送信してください。折り返し、応募受付確認メールをお送りします。
※応募者多数の場合は抽選となりますのでご了承ください。 ※ドメイン指定受信・拒否等の設定を行っている場合は、workshop.flair@gmail.comからの電子メール受信可能状態に設定してください。

Flair SPECIAL EDITION #03 PHILOSOPHY BOOK

September 2016 Autumn
THE TEIKYO SELF

edit & design
Mo-Green Co., Ltd.
publisher
TEIKYO UNIVERSITY

cover photograph
TETSUYA ITO
photograph
TETSUYA ITO, MASASHI ASADA,
KENJI NAKATA, AYUMIYAMAMOTO,
KENTARO OSHIO
text
KENTARO MATSUI,
TAKASHI SANO, SATOKO NAKANO

